令和５年度　奈良県立大学　地域創造学部　一般選抜（前期日程）　小論文問題（その２）

第２問　次の文章を読み、以下の問１と問２に答えなさい。

これからの人口減少社会におけるコミュニティというテーマを考えていくにあたり、どうしても避けて通れないのが、日本社会あるいは日本人と「コミュニティ」に関する話題である。

私はコミュニティには「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」という異質な二者があり、かつ両者は人間にとっていずれも本質的で補完的なものと考えている。ここで言う「農村型コミュニティ」とは、集団の中に個人が埋め込まれるようなコミュニティのありようであり、そのつながりは“情緒的な一体感”をベースとするもので、強固な結束性をもつ一方、外部に対して排他的な側面をもっている。それに対して「都市型コミュニティ」とは、あくまで個人が独立しながら、そうした個人同士がゆるくつながるようなコミュニティのありようであり、そのつながりは理念の共有や公共意識といったものをベースとするものである。

この場合、日本との関係で言えば、日本社会あるいは日本人の関係性が「農村型コミュニティ」に傾斜しがちであり、そのことが「ウチとソト」の明確な区別や、「“同調”と“排除”の二極化」といった性向として現れやすいことは確かである。

比喩的な言い方となるが、それは“稲作の遺伝子”とも呼ぶべき、2000 年に及ぶ稲作を中心とした社会構造の中で培われてきた、人と人の関係のあり方や行動様式に由来するものと言えるだろう。

この点は、本書のイントロダクションでも言及した、先進諸国の中で現在の日本がもっとも「社会的孤立」度が高いという現状にもつながっている。ここでの「社会的孤立」は、家族などの集団を超えたつながりや交流がどのくらいあるかに関する度合いを指しているわけだが、まさにそうした“集団を超えた個人と個人のつながり”の構築という点が、今の日本社会における様々な課題の根っこに存在しているだろう。（中略）

“見知らぬ者同士がちょっとしたことで声をかけあう”ことが、概して海外では（ヨーロッパなどに限らず、アジアの国々においても）日本よりもずっと多い。それはたとえば、電車などの中で棚に荷物を上げるのに苦労している人をさりげなく手伝うとか、道でぶつかりそうになった時に互いに少し笑顔をかわすとかといった、本当に日常の中のささいな行為なのだが、そうした見知らぬ者同士のやりとりやコミュニケーションが圧倒的に多いのである。

この場合のポイントは「見知らぬ者同士」という点であり、残念ながら現在の日本の場合、「知っている者同士」の間では極端なほどに互いに気を遣い、また同調的にふるまおうとするが、見知らぬ者あるいは集団の「ソト」の者に対しては、ほとんど関心を向けないか、潜在的な敵対関係が支配するという現状がある。そして、東京などのような都市は、文字通り“無言社会”というべき状況になっている。

近年半ば流行語のようにもなった“忖度”も、そうした日本社会の意識や行動様式の一断面と言えるだろう。私はそうした関係性のありようを、“集団が内側に向かって閉じる”という表現で表してきた。

このような傾向の強い日本社会での人と人との関係性を、いかに（集団の）ソトに向かって開かれたものにしていくか ― それはまさに先ほどの「都市型コミュニティ」の確立ということと重なる ― が、もっとも基本的な課題としてあるだろう。

言い換えれば、<u>現在の日本社会は大きな“関係性の組み換え”の時代</u>にある。つまり、ここで述べているような人と人との関係性のありようは、“国民性”といった不変の属性などではなく、先ほど述べた“稲作の遺伝子”という理解がそうであるように、その時代の生産構造や社会構造に適応すべく「進化」していくものだ。日本の場合、戦後においては農村から都市への人口の大移動が起こったが、そこでは「カイシャ」と「（核）家族」という“都市の中のムラ社会”が作られていったので、高度成長期には従来型の（農村型コミュニティ的な）関係性のままでそれなりの好循環を保つことができた。しかし人口減少社会を迎え、カイシャなどの組織が流動化し、かつ家族も多様化して一人暮らし世帯も急増する中で、「集団を超えて個人と個人がつながる」ような関係性をいかに育てていくかが日本社会の最大の課題となっている。

一方、ここまでの記述では、日本社会の現状についてかなりネガティブないし悲観的な評価を述べたが、他方において、以上とはむしろ逆に、「希望」のもてる様々な動きが“百花繚乱”のように各地域で生成しているというのも確かな事実である。（中略）

それらの多くは「新たなつながり」や、独立した個人が集団を越えてネットワーク化していくような方向を志向するものであり、高度成長期には見られなかった性格の動きである。

本書の中で言及してきた「社会的孤立」や“無言社会”的な状況について、これではまずいと感じ、日常的でささやかなものも含めて、新たなアクションや行動変容を人々が起こし始めているのが現在の日本ではないだろうか。

（広井良典『人口減少社会のデザイン』東洋経済新報社、2019 年より作成）

問1　著者は、日本社会のコミュニティの特徴をどのようにとらえ、今後、人口減少社会においてどのようなコミュニティをつくることが課題だと述べているか、<u>150 字以上 200 字以内</u>で記述しなさい。

問2　著者は下線部のように指摘しているが、最近の社会の動向や自らの体験等の例を挙げた上で、それがどのような関係性の再編といえるのか、<u>400 字以上 600 字以内</u>で論じなさい。